舉げて、Andrew Corsali, Maximilian of Transylvania, Barthama, Gaspar, Barreyros. Pigafeta 等皆此說の主張者であるといふ。がトレミー時代には今日の錫蘭が卽ち Taprobane となつて居るからスマトラ說は更らにそれより後くれ生じた誤說であることはいふ迄もない。

北攝より發見したる切支丹遺物

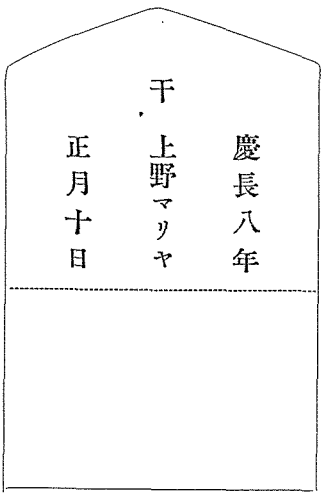
橋川正

昨年九月二十五日の黃昏、雷雨を衝いて予は大阪府三島郡石河村字安元の一寺に漸く辿り着いた翌二十六日は隈なく空はれて快い朝の光を背に浴びながら目的地たる隣村の淸溪村字千提寺（せんだいじ）に向つた。一行はこの地の藤波君兄弟と予と合せて三人である。

これより以前、大正九年の正月に藤波大超君が訪問せられた砌、談偶々切支丹に及び勢ひ高槻の城主高山右近の名が出て來たので、君が鄕土に往時の切支丹遺物が殘存してゐるかどうか怠らず注意を願ふと告げておいた。その後同君はしきりに踏査され、それらしきもの二三を報道された。既に二月十八日附の書信の中に、今日訪ねんとする切支丹敎徒の墓碑の事は記されて居たのである。予の心大いに動かされ實地見聞を約しつゝ、荏苒日を過したが、今日はじめてその約束を果し得ることゝなつたのである。

墓碑は字千提寺小字寺山と稱する里道の傍小高

い丘の上にある。石は厚さ四寸許高さは全長二尺二寸許、表面に左記の文字が刻まれてある。



これによつて見ると上野マリヤなる一婦人教徒の墓碑であることがわかる。先年京都北野から五基の切支丹墓碑が發見されたが、(註)その中淨光寺址から發見されたものには、慶長八年六月二十八日の刻銘があつて、正しく今回發見の一基と同年のものである。彼にあるIHSの記號を此には缺いてゐるが、十字架の形式は兩者よく似て居る。彼が高一尺五寸であるのに對して、此は稍大きいが然し二尺二寸許の中下部八寸許は土中に埋まり臺石を用ひない構造であるから、實際の碑面は彼よりも小さくなる勘定である。而して年代からいへば北野延命寺境内發見の慶長五年九月五日碑と前述の淨光寺址發見の慶長八年六月廿八日碑の中間に位する譯で、切支丹教徒の墓碑としては可なり古いものである。この墓碑所在地の所有者東藤次郎老人の談によると、この土地はもと〳〵東家のものでなく、中頃に買得したもので墓碑はその以前から存在したのである。予等の踏査した時には、碑は表面を下にして叢材中に倒れてゐたが老人の少年時代――今から約五六十年以前にはまともに立つてゐたといふ。そして立つてゐた場所と現に倒れてゐた地點とは大體同一で、墓碑の移動は殆んどないらしいやうな話であつた。この墓碑と東家とが直接關係のないことはそれでも判るが、この村に就いて上野なる名字があるかと訊ね

たが存在しないといふ答を得た。この墓碑の主は恐らく壓迫にたえかねて高槻地方の平野からこの山間に身を潜めた信徒の一人であるか、それともこの土地の人で入門し後にその家が絶えてしまつたのか、その何れかであらう。

萩や薄をかき分けて予等はせつせと撮影したり、拓本をうつたりしたが、一先づ土地の所有者たる東家を訪ねることにした。老人父子は快く予等を迎へてくれた。野趣ゆたかな午餐を享けた後、予は切支丹に關する遺物の有無を質して見た。有るやうだとはかねて藤波君から聞いてゐたので、その機會を捉へやうと思つたからである。この家は現在臨濟宗の門徒で佛檀には釋迦佛の木像が安置されてゐるが、段々話して居ると、昔から物置の隅に祕密のものが傳へられてゐることがわかつた。老人父子は予の請に應じてその祕密の品々を出して來られた。

小さい青銅の容器の蓋を門けると古いメダルが大小六個現はれた。紛れもない切支丹の遺物である

叢林中の基督教徒墓碑

その他に象牙彫の小さい婦人像や、木彫彩色の基督十字架像が持ち出された。十字架像は青銅の筒の中におしこめられて兩手とも離れてゐたが、附着させて見ると相當に優秀の作であることが判つ

た恐らく十字架ももとあつたのであらう。兩手兩足を貫く釘だけ殘存して居る。うなだれたその頭力なげに伸したその兩腕に可なり非凡な表現を示して居る。なほ油繪風の繪畫二軸と銅版畫一葉とを一見した。銅版畫はエルサレムをあらはしたものであり、油繪の一は師父シャヂエルの影像であるマンテルの中から出した兩手で胸の邊をおさへ、赤い心臓は十字架に貫かれて居る。而して三人の天使は雲を破つて十字架をとりまいてゐる構圖である。油繪の二は曼荼羅風の構圖で中央上部に聖母像、その下部に二人の師父を描き、SOCIETATIVS……XAVERIVS などの文字が見える。その周縁の左右と上部に十四個の描き割をして聖蹟をあらはしてゐる。恐らく繪解と共に渇仰讃嘆の心に惹きつけたことであらう。この繪の上部は長らくの祕藏のため大分傷んで破れてゐるのは惜しいが致し方がない。

木彫基督十字架像（東藤次郎所藏）

東老人はまだこんなものがありますといつて、古ぼけた一冊の皮表紙の書物を示された。縦四寸六分、横二寸分許の大きさで、一寸位の厚さである。一枚づゝ紙をはがして開いて見ると寫本の敎典で、終の方は白紙のまゝで殘されて居る最初の見出しには「御みいさのおがみやう幷に觀念ノ事」とある。何々の段ど條目を逐ふて新舊兩約

の聖書から種々の行蹟を拔萃したものである。その他「一七日にわたり最初のめぢさんの七ケ條」とか、「願念の本」とか、見出しを改めて書き集めたものである。內容の詳細は專門的研究の結果に待つことにして、今はたゞ過眼の際の手記にとゞめやう。但しその價値は大阪每日新聞（大正九年十月一日）紙上で報ぜられた程、大したものではない。書寫の年代は正確な事は判らぬが他の遺物とほゞ同時代で、德川初期を下るものでないことは明かである。これらの遺物以外になほこの地方には殘存してゐるものがあるらしいが、固く祕して容易に窺はしめない。それは何故であるかといふに、これらの遺物を日光の下に持ち出すならば、必ずその家に非常な災害が起ると信ぜられてゐるからである。なるほど切支丹禁制の時代に於ては、實に大變な災害を招いたに違ひない。これらの遺物は禁制の時代を通じて、物置の偶に或ひは長物

の底に奥深く藏められたばかりでなく、夥しく土中に埋められたことをも言ひ傳へてゐるのである。この地方にして相當の年齡の人ならば高山右近の名を知らないものは殆んど無いといつてよいのであつて、如何に往時切支丹が盛んであつたかを偲ばしめるのである。予はこの意外なる遺物の發見を端緒として續々その發見調査と研究との進められんことを期待したい。而してわが基督敎史研究のために、祕藏者諸氏が、その遺物を公開されんことを大いに慫慂したい。わが基督敎史の研究はその途上にあつて、未だ發見と調査の時代を脫しないと思惟する。予はこゝに今回の遺物發見の經過概要を報告して、自由なる研究のためにその資材をさゝげたいのである。猶京都帝國大學文學部考古學敎室では逐て本文遺物の研究を載せた報告を發行する計畫のあることを書添へて置く。

（註）

慶長時代の基督信者の墓碑（島田貞彦氏）考古學雜誌（八ノ三）

慶長年間の京都耶蘇信徒の墓碑（新村博士）本誌（三ノ一）

京都帝國大學考古學研究室發行繪葉書（第三輯）

批評

James Bryce —— South America, Observations and Impressions.

ジェームス・ブライス卽ち今のデクモント子爵の著せる此書は最初一九一二年卽ち同氏が南米旅行を終りて後幾もなく公にせられ、翌一九一三年には早くも其第二版を出し一九一八年に至りて更に版を重ね訂正增補を施したものである。北海岸の諸邦のみは旅程のうちに含まれて居らず、從つてそれに關する觀察も述べてないけれど、普通に人が南米に就いて知つてよい事は率ね書中に委くしてあり秘魯ボリヰアに關する考古談からアンデス横斷鐵道、マジェラン海峽の廻航など、旅行記として興味津々たるものである。されど予は今其書の全般に渉りて之を批評しやうといふのではない。書中所々に見えるブライスの南